平成 21 年度 スタンフォード大学海外研修 派遣報告書

国立がんセンター中央病院　放射線診断部　児玉清幸

1.　参加した目的と達成度について

本研修の参加目的として，スタンフォード大学における 3D imaging Lab の運用を学び，自施設に反映させることが挙げられる．本研修で得られた結果は非常に満足のいくものだった．事前情報では，3D 処理を専門とする部門という程度の知識しか持ち合わせていなかった．しかし，講義や見学によって 3D Lab の運用の実際を詳細に知ることができた．特に，トレーニングコースの存在など徹底した教育体制は，自施設にて行っている研修のお手本となりうるものだった．また，各部位，検査に応じて作成すべき画像のプロトコルが詳細に作成されている点も非常に興味深かった．日本では 3D 画像の質は処理を行う技師の知識や技量に依存する傾向があるが，3D Lab の手法は，医師が求める画像の質を平均的なレベルに担保する一つの手段であると認識した．また，3D 画像処理業務を国家ライセンスにしようとする動きがあるなど，日本でも学ぶべき点が数多くあった．

また，第 2 の目標である「分子イメージングや 7TMRI をはじめとする最先端の医療に関する研究の現状を知る」という目標についても，予想以上の結果を得ることができた．高磁場 MRI や分子イメージングは普段の業務では関わることのない分野だが，通訳の助けもあって講義内容の素晴らしさも容易に理解することができた．近い将来，そうした分野が研究段階から臨床に転換した時に，診療放射線技師として携われることを考えると，非常に刺激的で興味深い分野だった．

2．アメリカの放射線診療の利点と問題点について

本研修を通じて，米国における診療放射線技師の特徴はその専門性にあると感じた．放射線技師としての資格の上に，各モダリティ（CT，MRI，核医学，放射線治療…）の資格が存在する制度は，その分野の専門家を育てるのに最適であると考えられる．病院見学においても，米国の放射線技師は熱意をもって業務に取り組んでおり，自分のモダリティに多大な自信をもっていることが見てとれた．専門資格が業務の選択や待遇に反映する米国の制度は，日本でも参考にする必要があると考えられる．しかし，多岐に渡るモダリティを経験する日本の放射線技師と違い，専門以外のモダリティに対しては比較的無関心な米国の放射線技師に違和感を抱いた．

3．今回の研修で得られた成果を今後どのように活かすか

本研修を通じて，最先端の医療に関する知見を広めることができた．また，医療の未来に向かって挑戦し続けている研究者の方々の熱意を感じ取ることもできた．
今回の体験で得たものを自己の業務や研究に反映させ，また，今回参加できなかった方達に伝えていきたいと思う．

最後に，研修参加に際して快く送り出してくださった田仲技師長をはじめとする国立がんセンター中央病院の皆様に深く感謝いたします．

スタンフォード大学の Michael Moseley 教授と